

「イスラエルのパレスチナ攻撃を悲しむ」

2023年11月20日

聖書はユダヤ人・イスラエル人が書き遺した人類最大の文化遺産で、多くの人々に影響を与えて来た。聖書ほど、人類の歴史に貢献した書物はない。私は聖書に養われ、生きる力を与えられてきた。聖書記者たちが血を流し、身を削るような思いで書いたものと受け止め、彼らから学ぶことが出来て、敬意と感謝の思いで一杯である。そのイスラエル人が、パレスチナ人への残酷な抑圧と暴力を振るう現実が残念で、ただ、悲しく思っている。

イスラエル旅行は、イスラエルに利益を与えるだけだという批判があるが、イエスが生き、殺された国を見たいと、教会員でツアーを組んで行った。その時は、パレスチナのアラファトとイスラエルのラビンの間で、両国が共存し合おうという「オスロ合意」が交わされ、最も落ち着いた時であった。私は、パレスチナ人に会う機会を持ちたいと思っていた。ヨルダン川西岸のパレスチナ自治区エリコの露店で果物を売っていたので、私はグレープフルーツを買った。売り子の青年は、日本人が買ってくれたと大喜びをしていた。そのグレープフルーツが実に美味しかった。日本のスーパーで買うグレープフルーツは熟す前に収穫し、運ぶ期間に熟れるようにしているのではないか。エリコのグレープフルーツは完熟したものである。フィリピンのミンダナオ島の、米国資本で造られた大パイナップル農場に行ったことがある。そのパイナップルも美味しかった。やはり、完熟したものであったからである。農園で働く人たちは、自分たちは薬漬けのパイナップルは決して食べないと言っていた。果物は完熟すると美味しい。人間はなかなか美味しく、完熟できないものである。旅行業者にパレスチナ人に会わせてほしいと頼み、パレスチナ自治区のベツレヘムのルター派教会を訪ねることができた。インフラが整備されてなく、大型の観光バスは入れないので、小型のバスに乗り換えて行った。道幅が狭く、十字路に信号がなく、出会い頭に運転手たちは、俺が先だと大喧嘩していた。教会は『私はパレスチナのクリスチャン』を著したラヘブ牧師が牧しておられ、2時間くらいの会話の時間が持てた。この教会を訪ねた日本人はルーテル教会と私たちが二組目だと言われた。ラヘブ牧師の「私たちは二千年来、このパレスチナに住むクリスチャンです」と言われた言葉が心に残った。彼らは当然、この地が自分たちの祖国だと思っているのである。帰途、テルアビブ空港で、添乗員からパレスチナ人と会ったことは決して言わないように、言ったら、尋問を受け、出国が遅れますと言われた。また、英語を話せる人も「英語は分かりません」と言うように指示された。英語を話せないことが身の安全になるとは思わなかった。その後、教会は攻撃を受け、多大な被害を受けたそうである。ラヘブ牧師が来日した時、会いに行った。攻撃を受けて壊されたガラス片で天使の人形を作製、販売し、再建の資金にしていたので、買って帰った。天使は争いではなく、平和を望んでいるに違いない。

イスラエルの警戒は驚くほどのものである。ドイツ旅行の時、シナゴグ博物館で銃を持った警備員が大勢いて、手荷物検査をし、カメラは館内へ持ち込みはできず、受付に置くようにとのことだった。私は、イスラエルはよっぽど悪いことをしているから、警戒が厳重なのだと思った。イスラエル人は国連で建国が承認されたとは言え、パレスチナを占領し、彼らを抑圧している事実を知っているのである。この土地に民族の存亡がかかっている。パレスチナ人は住んできた地域から追い出され、また、残酷な攻撃を受けているのだから、怒り心頭で、自由と解放を求める。互いに譲り合えない。しかし、今は停戦、人道支援、拉致者解放を行う時である。世界は徒な分断に走らず、まずは、互いの生存を認め合うことではないか。